

4月例会案内の案内と報告募集です。

4月15日(日) 15:30～場所:メートプラザ佐賀」2F視聴覚室  
(佐賀市兵庫町藤木1006番地1:電話33-0003)

研究報告を募集します。

ぜひ、大勢の皆さんの研究会ご参加をお待ちしています。



#### 会員便り

#### 前山会長から、小澤健志さんの講演会参加について

去る2月18日(土)はKKRホテル博多での西日本日独協会講演会と懇親会に参加してきました。講演は小澤健志さんの「17世紀のドイツを觀た長崎・平戸出身の日本人」です。15時40分佐賀城本丸歴史觀覧の天神行き西鉄バスにりましたが、途中から長崎自動車道は雪が舞い前方視界不良。福岡都市高速も17時20分に閉鎖されました。予定より40分遅れで17時50分頃天神バスセンターに着きました。地下鉄薬院大通り駅を出ますと吹雪で着ていたコートは真っ白になりました。父親がVOC社員のドイツ人、母親が平戸生まれの日本人のPeter Hartzing(1637~1680)のロマン溢れる数奇な人生についての講演でした。1639年の鎖国令のため1641年、父親、母親、弟の家族4人で帰欧。オランダのライデン大学やドイツのハノーバー大学で勉学。宮廷顧問官や銀鉱山責任者となり財をなし、彼が遺したHartzing奨学金は、現在もメアースのギムナジウムの学生に役立っているとの事でした。

# 鍋島勝茂の淋病と元茂出産

江戸時代初期の我が国第一の名医は、曲直瀬道三、玄朔であった。肥前出身の曲直瀬家門人が全国で最も多く28人もいたことを以前紹介した。しかし、なぜ、肥前門人が最も多いのかの究明は今後の課題であった。今回、その解明の一端になる資料をみつけたので紹介する。

『医学天正記』（慶長12年・1607成、寛永4年・1627刊）という診療記録がある。曲直瀬玄朔の28歳からの30年間にわたる349症例の診療記録である（ただし、異本では625例などもある）。

『医学天正記』淋の部に、次の記載があった。

淋 三十七

- 一 五ノ二 鍋島信濃守(勝茂)年三十余 少年ヨリ淋病ヲ患フ、  
 発ラ去フ、時ラ不ス、須ク甚タ発シテ渋ヲ閉ツ、通シテ後ニ痛ミ甚タ  
 張囊ノ下ヲ引ク、大便結ス、脈弦實ナリ、 清源湯  
 八正散ニテ 効ラ不ス  
 四物ニ 翹・通・梔(くちなし)(生也)各中  
 倍・虎各小ヲ加テ効アリ  
 関元ニ灸ス 五 十 壮 膀胱ノ俞ヲ各五十壮

(『近世漢方医学書集成6 曲直瀬玄朔』・名著出版、157～8 ページ)

関元はへそ下三寸の灸のツボ。膀胱俞は膀胱炎などの場合の灸のツボ。

鍋島信濃守は、戦国武将で佐賀藩祖ともいべき鍋島勝茂(1580～1657)である。勝茂が少年の頃より淋病に苦しんでいたというのも驚きだが、三十余歳の頃に、玄朔に治療を受けたとあるので、この診察は、慶長15年(1610)以後のことだろう。

当時の淋病といわれるものが、現在でいうものと同じであったか、異なるものも総称したかは現時点ではわからない。ただ、種々の薬を調合され、効果があり、灸により健康になったようなので、現在の淋病とは異なるように思う。

この治療のあと、勝茂34歳の慶長18年(1613)に家康の養女である高源院との間に長男忠直(松平肥前守)が生まれ、勝茂36歳の元和元年(1615)11月12日に、直澄(蓮池藩鍋島甲斐守)が生まれている。勝茂43歳の元和8年(1622)1月21日には、直朝(鹿島・鍋島和泉守)が生まれている。やはり健康になったのだろう。

さらに、もう一つ、佐賀藩の歴史に深い関係のある診察記録がある。

妊娠の部には

- 一 鍋島信濃守 内 年二十余 妊産  
 月傷寒、寒熱汗無ク頭痛ニ嘔吐ス、脈浮数ナリ、  
 解肌湯傳 芎蘇散  
 芎 蘇 句 朮 門 販  
 葛 等分 甘 葱 姜  
 十一日  
 ○衄出 又破水ノ如クナル者多ク下ル  
 芷ヲ加フ 梔  
 十一日  
 ○安産、産後身熱頭痛ニ  
 清榮湯 小柴胡ニ四物地黄生用ヲ合ス

莎便 芷ヲ加フ

(『近世漢方医学書集成6 曲直瀬玄朔』・名著出版、一九三～四ページ)

とある。

鍋島信濃守内が、妊娠して産み月に熱を出したので、玄朔の治療を受けた。その甲斐あって、十一日に無事子供が生まれた。玄朔は産後の頭痛には清栄湯などを与えたという診察記事である。

勝茂室は、正室が戸田勝隆女(娘)で、継室菊姫(高源院)が徳川家康養女(岡部長盛女)、側室が花、お岩(戸田勝隆女侍女で小西三右衛門娘)などであった。

勝茂の子のうち、長男元茂(1602～)が、慶長七年十月十一日(1602)生まれなので、これは、元茂の誕生のとき、曲直瀬玄朔に診察してもらったものとわかる。従ってこの鍋島信濃守内は、元茂の母、小西三右衛門娘の岩と判断できる。

ただ、『小城町史』によれば、元茂は蓮池小捲(小曲)の館で生まれたとあるので、玄朔がわざわざ、この肥前蓮池まで来たのだろうか、という疑問は残る。

『医学天正記』のこの二つの診察記録から、鍋島勝茂が、慶長7年の元茂の出産とその後の養生に大変世話になった曲直瀬玄朔に、30余歳になった慶長16、17年ごろに、淋病の治療をうけたという流れが見えてくる。

そして、勝茂がお付きの医師らへ、曲直瀬家への医学修業をすすめたであろうことが推察できる。こうして、曲直瀬家門人に肥前出身者が多いことの一因がみえてきた。また、元茂の出産の状況とが長男にもかかわらず、正室の子でなかったゆえに、勝茂が、佐賀藩は忠直に、小城藩を元茂にゆずった事情もうかがえる。

さらに、『明暦二年御直印之着到(嘉永二年子孫調書)』(鍋島報効会蔵・佐賀県立図書館複製本による)に曲直瀬家門人の松隈玄湖についての記事の背景もよりよく見えてくる。

同(知行)貳百五拾石 松隈玄湖

内切米五拾石

右玄湖口二代玄湖卒人初代ノ兄玄礎、紀伊守元茂之乞ニ依而、小城家中ニ成ル、玄礎より三代甫庵、綱茂公御代被召出、七代当時、甫庵也、

曲直瀬家門人松隈玄湖は250石(内切米50石)取りの佐賀藩医としても有力な家であることのほかに、玄湖の兄の玄礎(松隈亨庵)が、小城鍋島藩主元茂の乞いにより小城藩医となった理由が氷解する。

つまり、元茂は自分の出産のときに立ち合ってくれた曲直瀬玄朔、いわば生みの恩人である、その門人である玄礎を、ぜひ小城藩医として欲しいと願ったのも無理からぬことといえよう。



## 編集後記

例年になく遅い春ですが、それでも菜の花が咲き出しました。サガン鳥栖も明日からJ1の試合です。4月の例会の報告を募集します。大学もまだ入試があります。年度替わりの忙しい時期かと拝察いたします。御自愛ください。 青木歳幸